かみさまといっしょ

銀丈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かみさまといっしょ

【Ｎコード】
Ｎ１７８０Ｚ

【作者名】
銀丈

【あらすじ】
祖母が危篤との報せに、両親と共に山奥の神社を訪ねた琢磨。祖母にひとりぼっちを強いた「神」への怒りを抱く彼に、当の祖母は別れ際言った。
「神様を頼んだよ」
複雑な思いで遺言を受け取った琢磨の前に、本当に神様が顕れた――。

※20120113全面改稿

序／お社へ

祖母が危篤。

急な報せを、源琢磨（みなもとたくま）は走り出した車の中で聞いた。

しかもその祖母が、床に伏せりながら琢磨を呼んでいるのだという。

放課のチャイムが鳴った直後の高校正門へ車で乗り付けて、出てきた男子生徒を車内へ引きずり込むなり走り出す――両親が一人息子にやらかしたとはいえどう考えても通報沙汰の手際も、事情を聞いてしまえば文句は出なかった。

とはいえ、もう少し現状を把握したかった琢磨は、アクセルペダルを踏みっぱなしの鬼気迫る父ではなく、同じ後部座席で隣に座っている蒼ざめた顔の母に訊いてみた。

「母さん、おばあちゃんそんなに悪いのか？」

「元々山奥に独りで暮らしていたし、体を壊しても、どうしてもってお社を離れなかったからね。お医者さんが診（み）に来たときにはもう、随分ひどい状態だったらしいわ」

琢磨の脳裏に、寂（さび）れきった神社の境内で竹箒（たけぼうき）を片手に笑う祖母の姿が浮かんだ。

琢磨の祖母は、琢磨が物心つく前にダム湖に沈んだ父の故郷、源村で巫女をしていた。

村がダム湖に沈んでなくなり、人が方々へ散っていく中、祖母は『神様が寂しがるから』と独りダム湖のほとりへ移設された神社に残ったのだ。

幼い頃、夏休み冬休みが来るたびそこへ帰省しては遊んでもらっていたが、しばらく会わないうちにこんな報せがあるとは思いもしなかった。

「何が神だ」

行く手を見据えたまま、琢磨の父の押し殺した低い声が車内にこ

ぼれた。
「何度も一緒に暮らそうと誘ったのに……ありもしないもののために何やってるんだ……！」
そうだ、と琢磨も自分の心がささくれ立っていくのを感じた。
いい歳をした大の男として口に出す気こそないものの、使い捨てのカイロを捨てるときさえありがとうと感謝して、使わないのに手元に置かれる道具はかわいそうだ、と持ち物にスペアを用意しない、そんな優し過ぎる祖母を、琢磨は大好きだった。
祖母の優しさを振り回し、ひとりぼっちで暮らさせ弱らせるような理屈は絶対に間違っている。
それが神だというのなら、神なんてもの、いてたまるものか。

壱／神様がみてる

1－1

一晩ほぼノンストップで走り続けた昼下がり、ダム湖のほとりの神社に着いた琢磨（たくま）と両親を出迎えたのは、白衣を着た男女二人組だった。

「源さんの息子さん方ですね――後藤です」

ジャケット代わりに白衣を羽織り、首には聴診器、といかにも町医者といった風情の小柄な初老の男が、琢磨の父に白髪交じりの頭を下げる。

「……カナハ」

飾り気のない服にやはり白衣を羽織った長身の若い女が無表情のまま目を伏せ、かすかな会釈と共に名乗る。

琢磨は思わず女を凝視してしまっていた。美形だ、というのが第一だが、その跳ね気味の短い髪は銀色で、眼は深い青色、明らかに日本人の造作ではない。

その視線に気付いたらしく、琢磨の父を案内しかけた後藤が琢磨に声をかけた。

「遠い国から、勉強に来ているそうだよ」

「そうなんですか」

「そう」

琢磨の相槌に本人がうなずき、一瞥（いちべつ）だけ投げて後藤と共に琢磨の脇を抜けていく。話はふくらまないが、かといって関わりを拒絶するようなトゲも感じない。どうやら、大変にシンプルな人柄らしい。

「こちらです、といってもご存知だとは思いますが」

案内された先の和室で、年老いた女性が床についていた。

「母さん」

「お義母さん」

「おばあちゃん！」

口々に呼ばれ、彼女はうっすらと目を開けた。
「ああ……錬磨(れんま)に、朱鷺(ときえ)絵さん。それに――」
すうっと笑みの形に目が細まる。
「琢磨。来てくれて……ありがとうね」

1―2

「おばあちゃん」
つぶやきながら祖母の傍らに腰を下ろしたきり、琢磨(たくま)は口を開くことができずにいた。
素人目に見ても、弱っている。穏やかな笑みをたたえた表情はそのままだが、覚えているのは立ち姿ばかりで、こうして上体さえ起こさず横になっている姿はほとんど覚えていない。雰囲気そのものにももっと張りがあったはずだ。
横になったまま、琢磨の祖母は穏やかな眼で孫を見つめている。
容態を詳しく訊くため、両親は後藤やカナハと共に離れた部屋へ去り、今この場には琢磨と祖母の二人きりだ。
沈黙に耐えきれず、琢磨は口を開いた。
「おばあちゃん……元気だった？」
元気なわけがない。そうであればこうして呼ばれることなどなかったのだ。
気まずそうな琢磨に、祖母はころころと笑い、そして咳(せ)き込んだ。乾いた咳の弾みで上体が起きる。
「おばあちゃん！」
思わず腰を浮かした琢磨を手で制する、が琢磨は構わずその体を支え、背中をさすった。そして気まずそうな琢磨の表情が渋みを増す。どうしようもなく、祖母が軽く、そして小さく感じたのだ。
「元気だよ。……大きくなったねえ、琢磨」
「最後に遊びに行ったの、中1の夏休みだったっけ。オレもう高校生だぜ――」
語尾が途切れる。小さな祖母の手が、寄り添っている琢磨の頭を

なでていた。
思春期真っ盛り、いっぱしの男を気取りたい身としては照れくさいことこの上なかったが、祖母をむげにできず、人の目もないので、しぶしぶされるままでいる。
布団に入っていたにもかかわらず、その小さな手が冷たいことが、琢磨にはつらかった。この手は、ずっと暖かかったはずなのだ。
「ねえ、琢磨」
呼ばれて目を向けたものの、琢磨は思わず口をつぐみ返事をしそびれてしまった。祖母の眼差しはいつになく強く、まっすぐに琢磨の眼を射ていた。
「ひとつ、頼みがあるんだよ」
「頼み？」
「私の後を継いでほしい」
「……え？」
「私のいなくなった後は、琢磨が神様をお祀(まつ)りしてほしいんだ」
「後を継ぐ？　お祀り？」
空白。言われたことがいまいちよくわからない。それでも、祖母の言葉は続く。
「もうすぐ、琢磨や錬磨(れんま)、朱鷺絵(ときえ)さんとはお別れだ。そうしたら、このお社もなくなってしまうだろう。だからその前に、御神体を琢磨が持って行ってほしい」
「ちょっと……ちょっと待てよ、おばあちゃん」
頼みの内容が頭の中にしみこむにつれて、琢磨の体に熱が湧き上がる。紛れもない、それは怒りだ。
「オレ、おばあちゃんの言うことなら何だって聞く。でも、それはイヤだ」
「琢磨？」
「おばあちゃん、神様をお祀りするためにここでずっとひとりぼっちで暮らしてたじゃないか。オレだけじゃない、父さんや母さんともあんまり会えずにさ。それで今、おばあちゃんがこんだけ弱って

るんだろ。それって結局、神様がおばあちゃんをこんな目にあわせたんじゃないか。違うかよ」
祖母の肩に回した腕がかたくこわばる。目を合わせないまま琢磨は言葉を続けた。
「オレ、おばあちゃんを苦しめたものを大事になんて思えない。父さんに相談すればいいじゃないか」
思わず祖母を睨んでしまいそうだった。祖母の大事なものよりも、自分にとっては祖母自身の方が大切なのだ。祖母の生き様を否定して、祖母を傷つけている自覚はある。それでも、これを譲る気はなかった。
「琢磨、本当に優しい……立派になったねえ」
穏やかな声に、祖母を否定して自己嫌悪に陥っていた琢磨は顔を上げた。
声色そのままに、祖母は確かに笑っていた。
「違うよ、琢磨。私はひとりぼっちなんかじゃなかった。それに、これは琢磨にしか頼めないんだ」
「オレにしか？」
「錬磨も、朱鷺絵さんも、神様を知らない。でも琢磨、お前は神様と会ったことがあるんだよ」
「なんだよ、それ……」
「一気に話して、疲れてしまったよ。寝かせてくれるかい」
「あ、ああ」
祖母をそっと横たえ、琢磨は改めて布団の横に腰を下ろした。ふう、と長めのため息をつき、祖母が琢磨に目を向ける。
「琢磨、錬磨たちを呼んできておくれ。なるべく、急いでね」
「わかった」
祖母が人を急かすことは滅多にない。余計な口をはさまず、琢磨は部屋を後にした。

1—3

さっきまでの弱った様子が嘘のように、琢磨の祖母は息子夫婦それぞれと話し込み、話を終えると、また起こしていた上体を横たえ、ふうう、と長いため息をついた。
「ねえ、琢磨」
「なんだい、おばあちゃん」
「一つくらいは、わがままを聴いておくれよ」
「……わかったよ」
気持ちの整理などつかないし、何をすればいいのかもよくわからない。だが、イヤだ、とは言えなかった。
孫の返事に満足げにうなずくと、琢磨の祖母は目を閉じた。
「錬磨、朱鷺絵さん、琢磨、後藤さん、カナハさん、……みんな、ありがとうね」
ふううう……と長い長いため息の中、全身から力が抜けていく。
そして、彼女は二度と息を吸わなかった。

1―4

月明かりの下、琢磨は本殿の陰、縁に腰を下ろしていた。
町医者と助手の二人は町へ帰り、両親は葬儀の手配等を一通り済ませ、二人で話し込んでいる。
ただの高校生でしかない自分にやれることはなかった。
ゆるりと風が揺れ、神社を囲む森の木々が葉を鳴らす。
思ったより、涙は出なかった。ただその代わり、どうしようもなく気力が湧かない。きっと『心に穴が開いた』というのはこういう様を指すのだろう。
祖母のことはいくらでも思い出せる。しかし当の祖母がもういない、という事実を意識するたびに、思い出しては浮かび上がる暖かな感情がどこかへ吸い込まれ色を失っていく。
「ひとりぼっちなんかじゃなかったって……まるで誰かが……」
いたみたいじゃないか、とつぶやきかけて、ふと考え込む。
そういえば、幼い頃、両親に連れられて帰省するたびに、この境

内や周囲の山の中で祖母以外の誰かと遊んだ気がする。
「……誰だ？」
その頃は深く考えもしなかったが、そもそもこの神社は山奥にある。ダムに沈んだ村から移設されたものだ。最寄の人里といえば、車で数時間かかるふもとの町くらいしかない。わざわざそんな遠くから、訪ねてくる人間などいるのか？
確か……女だった気がする。長い黒髪で、そう、白衣に緋袴の巫女装束だった。祖母の落ち着いた色合いの和服と好対照だったので印象に残っていた。
名前は何と言っただろうか。結構短い響きで、漢字も当人から教えてもらっていた。
「確か……二文字……」
記憶を頼りに、開いた手のひらをなぞり、書いてみる。物心ついてから調べてみて、普通の読み方ではないことに驚いたので発音は間違いない。
「紗雫（さな）……だったかな」
「媛（ひめ）を付けぬか。呼び捨ては……なんだ、まだちょっと早いぞ」
「だが断る――は！？」
間近に美女。縁に外側からもたれて両手で頬杖をつき、深みのある翠緑の眼が琢磨をまっすぐ見上げている。
反射的にのけぞり、既にバランスを崩した状態で立ち上がろうとした拍子に、本殿の壁に後頭部を打ち付けてしまい、頭の中に火花が散った。
「おおぉぉぉ……！」
頭を抱えながら転げまわる。痛い。これは大変痛い。とん、と軽い音が聞こえたかと思うと、先ほどと同じ低女声（アルト）が頭上から降ってきた。
「なんとも、痛そうじゃな……大丈夫か？」
口調はともかく、綺麗な響きだ。
「大丈夫なわけねえだろ……じゃない、いつ現れたんだあんた」

涙目で頭をさすりながら、間近に見えていた草履(ぞうり)とそれを履いている白い足袋(たび)をたどり、相手を見上げる。
「ぬしがわしの名を呼んだときよ。もっと早(はよ)う呼んでもらいたかったものだが、何にせよ久しいな、琢磨坊(ぼう)」
腕組みと共に笑う、巫女装束に長い黒髪の美女。その両耳の上辺りからは鹿のそれに良く似た、枝分かれした一対の角が生えている。あからさまに人間離れした特徴に、遠い記憶にかかっていたもやが一気に晴れた。
そうだ、源琢磨はこのひとを知っている。そして、記憶の中の祖母は彼女を――。
「――神様」
そう呼んでいた。

弐／神様は風邪をひくか

2―1

「さて、球磨(くま)はどこだ？」

笑みも束の間、神様は真面目な顔で琢磨(たくま)に訊いた。

源球磨(みなもと)。琢磨の祖母の名だ。

「おばあちゃんは……」

「そこか」

琢磨の視線を追って見当をつけたのか、返事を待たずに歩き出す。迷いのない足取りが、彼女が境内を把握していることを示していた。

「待てよ神様、おばあちゃんは、もう」

「知っておる」

置いてきぼりを食らいかけて小走りで追う琢磨の声に、足を止めず肩越しで応え、玄関を抜け、ふすまを開ける。明らかに慣れた様子で伸びた指がスイッチを捉え、部屋の中が明かりで照らし出された。

顔に白い布をかけられて布団に横たわる琢磨の祖母、その傍らに正座すると、神様は神妙な面持ちで手を合わせ、目を閉じた。

確かに彼女は普通の人間ではないのだろう。十年以上前の記憶はややぼやけているものの、その中の端正な横顔は目前のそれとほとんど変わらない。

「大儀だったな、球磨」

神様が、手を合わせるという、人の流儀で人の死を悼(いた)む。その姿は琢磨にひどく複雑な思いを抱かせた。

神様のために独りここで暮らしていた祖母。少なくとも祖母は神様を恨んでいなかったし、神様も今こうして祖母の苦労に報いた。祖母自身に遺恨があるとすれば、それは晴らされたことになる。

だが。ぐっと琢磨の手が拳に変わり、力がこもる。

今日祖母を亡くした、もし祖母が神様に関わっていなければもっ

と長生きできていたかもしれないという源琢磨の遺恨は、どこへ持って行けばいいのだ。
琢磨の見つめる先で、神様が目を開き、振り返った。
「琢磨坊、球磨は何か言っておったか」
「……オレに神様を祀れってさ」
「そうか……その他には」
「おばあちゃんは神様を恨んでなかった。ひとりぼっちなんかじゃなかったって言ってた」
琢磨の答えに、神様は愁(うれ)いを帯びた眼を琢磨の祖母に向けた。
「苦労をかけたのに、な」
「なあ、神様」
「なんじゃ」
改めて向けられた深い翠(みどり)の瞳を、見返す。
「お祀りするって、何をどうすればいいんだ？　もっと早くオレに代わっていれば、おばあちゃんはもっと長生きできたのか？」
あんたのせいでおばあちゃんが今日死んだのか、と直接口に出しては訊けなかった。自分を幼い頃から知っているはずの相手を真っ向から切り捨てることまではできなかったのだ。
「ぬしは、わしが嫌いか？」
「なりそうで困ってるんだよ」
「そうか」
神様は居住まいを正し、琢磨を見つめなおした。琢磨もまた、その傍らに正座する。
「わしを忘れてくれるな。じゃが、もし憎いと思ったなら、そのまま忘れよ。それだけじゃ」
「どういうことだよ」
「人のいないところに神はない。わしという神を願い『居る』と思う者がいるから、わしはここにおる」
「いると思ったから、いる？」
つぶやいて、琢磨ははっとした。さっき顔を合わせたとき、神様

は『呼んだから現れた』と言ったではないか。つまり、そのことを言っていたのか？
「わしは人の願いだ。願われた在り方をわし自身が拒むことはできぬ。わしを悪しき存在として憎む者がいるとき、わしはそのとおりに悪しき神となってしまう。そして、わしを知り左右できたのは、源の村なき今――」
「この神社を守っていたおばあちゃんだった」
神様は小さくうなずいた。
「この身は、いつか誰かがこの地の天災に心があると思ったとき生じたものじゃ。わしが悪神となったときは、山をも崩す災禍が人に向かうことになる」
じゃから、と神様は自分の胸元に手を当てた。
「球磨はわしと共にわしの神威をこの地に留め続けることを選んだ。忘れれば無用な縁から解放され、かわいい孫とも暮らせようものを、球磨はわしの心を惜しんだのじゃ」
「おばあちゃん……」
祖母らしい。きっとそういう優しい選択は確かにあったのだろう。
「しかし、一つ誤算が出ての」
「誤算？」
「琢磨坊、ぬしじゃよ。初めて逢うたときは、森の中で迷って泣いておったの」
か、と琢磨の耳が赤くなる。
「ちょ、茶化すなよ！」
「ふ、ふ、ふ。あれは全くの偶然でな、元々球磨にぬしをわしと引き合わせるつもりはなかったのだ。球磨の元まで送り届けて終わりのはずが、ぬしもぬしじゃ。味をしめたのか知らぬが、それから繰り返し山に踏み込んできおって」
言われて、一緒に山の中を駆け回った記憶が鮮明に蘇ってくる。今になって思えば、神様と鬼ごっこだのカブトムシとりだの、雪だるま作りだのやっていたことになる。ある意味贅沢な休みを過ごし

ていたわけだ。
「あ――」
芋づる式に、ある記憶が身じろぎする。
輪郭だけに薄れていた面影が、目前の美貌と違和感なく重なった。
そうか、彼女が――彼女だったのか。
それは火傷のような記憶だ。思い出さなくてもいいようなことまで蘇ってしまったらしい。
横目で神様の横顔を盗み見るが、神様は遠い眼をしていて、琢磨の表情には意識が向いていない様子だった。
「――お陰で球磨(くま)にも欲が出てしまった。わしはよいと言ったのだが、ずっと悩んでいたようでな。ぬしがここにおるということは、最後の最後になって、ぬしを巻き込んででもわしを長らえさせようと思ったのじゃろう」
「そうか……だから、オレに」
神様を頼む、なんて言ったのか。わがままを承知で。
「得心は、いったか？」
「まあ、事情は分かった。誤解してたみたいだ、その……ごめふ」
語尾が、文字通り埋まった。すすす、と膝立ちでいざり寄ってきた神様が、琢磨の頭を胸元に抱え込んだのだ。
「わかればよい。それにしても、愛(う)いのう、久しいのう」
抱えた頭をなでまわし、にこにこ笑顔でつぶやく神様。しかし抱え込まれている琢磨は笑うどころではない。のりの利いた白衣越しでもはっきりわかる暖かく柔らかな質感に顔が埋まり、今にも窒息しそうなのである。
これは――凶器だ。
「神様、放してくれ。苦しいから！」
もがく琢磨。
「これ、くすぐったいではないか。暴れるでない」
「いや無理、頼むから放してくれ」
神様の腕はびくともしないが、もがくのをやめるわけにはいかな

い。苦しいのはもちろんだが、これ以上密着し続けるのは思春期真っ盛りの一男子として大変困るのだ。
ただでさえ気後れしそうな美女を相手に、祖母の前という不謹慎な場で、この無節操な生理現象がばれたら、死ぬ。紳士としてのプライドが。
「まったく、そういうところは小さな頃から変わっておらぬのう。一丁前に恥ずかしがりおって」
つまらなそうに琢磨の顔を放し、しかし名残惜しそうにもう一度頭をなでると、神様は腰を上げた。
「伝えることは伝えたぞ、琢磨坊。どうするかは明日訊きに来る。またな」
「あ、ああ、おやすみ神様――って、神様」
「ん、どうした？」
「普段どこで寝てるんだ？」
「わしか。御神体を納めたお堂の中じゃ」
当然のような返答。だがそれは人としてちょっと当然の域を外れている。
「……いや寒いだろそれ」
「言ったじゃろう、琢磨坊」
逆に神様の方が困ったように眉を寄せた。
「心配はしてくれるな。ぬしがそう思ったとたん、わしは人並みの体になるんじゃ。神に風邪とやらを患わせる気か」
「心配するなってのも無茶な話だぞ、人として」
角が生えているのは明らかに普通ではないが、その外見はあくまでも若く綺麗な女性である。
「では言い方を変えるぞ。信じよ、琢磨坊」
「……わかったよ」
神様が立ち去り、静けさを取り戻した部屋の中、琢磨は祖母につぶやいた。
「とんでもない頼みごとしてくれたんだな、おばあちゃん」

これは確かに、わがままだ。普通に通そうと思って通せるような話ではなかっただろう。

しかし、頼みごとそのものが意味する再会は、決して迷惑ではなかった。

2―2

神社は森の中にある。境内を見下ろせる高さの大樹は珍しくない。

そのうち一本の、太い枝の上に人影があることなど、無論琢磨が知る由はなかった。

夜風に、短い銀髪が揺れた。

参／神様と改造人間

3―1

それを言ったとき、彼女はきょとんとした顔になった。

重ねて言ったとき、彼女は笑い――そして笑った。

初めて見る種類の笑顔がとても綺麗だった。

だから。

すぐにそれを閉ざした寂しげな陰（かげ）が、記憶に刺さり、今も残っている。

3―2

天井に違和感。

見慣れないと思ったら、祖母の家に泊まったのを忘れていた。

腹筋任せに上体を起こしてみて、琢磨（たくま）は眉（まゆ）を寄せた。元々未練なく起きられる体質ではあるが、それにしても頭がすっきりしている。

夢を見た直後に目覚めると大抵こうなる。しかし今は内容を思い出せないのに何とも言えない後味の悪さだけがよどんでいた。

「朝っぱらからろくでもないな」

とはいえ、祖母を亡くした昨日の今日だ。底抜けに気分が晴れやかというわけにもいかない。

部屋の布団は三人分。両親はまだ眠っていた。琢磨としては随分遅くに布団へ潜り込んだつもりだったが、こういうとき自分の睡眠習慣の健全っぷりを実感する。

昼前には葬儀屋が祖母を連れに来るそうなので、それを見送り次第ここを発ち、家へ戻ることになっている。その間の手持ち無沙汰だの沈む気持ちだのは、体を動かして解消することにしよう。

枕元の手荷物をあさると、琢磨は部活用のジャージに着替え、部屋を後にした。

3―3

「源琢磨は陸上部員である。彼を迎え入れた陸上部はレギュラーしかいないのに全国制覇を企む脳筋の弱小集団である。源琢磨は自分の健康と暇つぶしのため、今日も走るのだ！」

「変な要約するな！」

琢磨は思わず真横を振り向き、併走する神様に叫んだ。

準備運動もそこそこに走り出し、木の根をよけたり段差を跳び越えたりと久々の山の中を楽しんでいると、いつの間にやら神様も隣を走っていた。世間話ついでに近況報告をしてみれば、飛び出したのが先のフレーズである。

「大体それ仮面ライダーのフレーズだろ！　そんな無駄知識どこで仕入れたんだ！？」

「てれびじょんに決まっておろう。むしろぬしが生まれる前にわしが見たものを、ぬしがなぜ知っておる」

「世の中には再放送ってもんがあってだな……っつーことはリアルタイムで見てたんかい！」

「最初は妙な趣向のほらあ番組と思うたが、存外光るものを感じての」

実際、連作シリーズとなり、親子世代を巻き込む形で現在も人気を維持していることを考えると、なかなかの慧眼（けいがん）である。

「わしの好みは、鏡の世界のアレじゃな。どうもあの赤いのが他人とは思えなくてのう」

「平成ライダーまで網羅してんの！？」

「ぬしの好みはなんじゃ？」

「え、オレ？」

まさか神様と仮面ライダー談義を始めることになるとは思わなかった。歳がいくつか見当もつかないが、ひょっとすると世界初のオタクなんじゃないかこの女（ひと）。

「オレは……」

割と真剣に悩む。ヒーローは好きな方だ。誰も彼も苛烈な生き様

を駆け抜けた仮面ライダーを、これとは決めづらい。
「……ん？　ヒーロー？」
ふと頭をかすめた考えに、琢磨は首をかしげた。
そも、ヒーローとは。強きものであり、正しきものである。結果的に正しく見えるダークヒーローという例外もあるが、それとて人が願う、正義を体現する存在であることに変わりはない。
それは人に願われた存在だ。そう、この仮面ライダーオタクと同じように。
「そうだ――ネイガーだ！」
思わず足を止め、叫ぶ。この発想、彼女にはうってつけじゃないか！
「ねいがー？　何じゃそれは、新作か？」
さすがに全国展開していないローカルヒーローまでは知らなかったらしく、不思議そうな顔で歩み寄ってくる神様の両肩を、琢磨はがっしりつかんだ。
「わ……」
「神様、空飛べるか？」
「ま、まあ……雲があればな」
「力、強いよな」
「熊を投げ飛ばしたことならあるな」
「よし！　決まりだ！」
「いい加減にせい！　説明せんか琢磨ぼ――」
「一緒に来ないか？」
語尾を食わんばかりの勢いで訊かれ、神様はぽかんと口を開けて、鼻先に迫っている琢磨の顔を見つめ返した。
「人里に……降りろ、と言うのか？」
「ああ。神様は神様らしく、スーパーヒロインになればいいんだ」
「は？」
口が開きっぱなしで、さらに目が丸くなる。
「神様を知ってる人間が神様を左右できるって言うなら、たくさん

の人間が神様を知って、いい神様だと思うようにすればいい。それなら誰かがちょっとやそっと神様を憎んだって、蹴散らしちまえるさ」
「琢磨……」
言われたことがのみこめたのか、神様は真顔になっていた。
「琢磨……ぬしは、なんという……」
「オレ、ずっと山の中で生活するのはたぶん無理だ。かといって神様のこと山の中にほっとくのもイヤだ。だから、うちに来ればいい。オレの言うこと、間違ってるか？」
「ふ……ふ、ふ」
指先で目をこすり、琢磨の手から抜けると、神様は肩を震わせながら目をそらした。
「両親には、何と言うのだ？」
「あ……どうすっかな」
考えていなかった。さすがに神様をペット待遇で家に入れるわけにはいかない。仮に内緒で、ばれなかろうと、ドラえもん生活をさせるのは大変心苦しい。絵だけ考えると余りに似合わなさ過ぎてかわいいが。
「詰めが甘いのう、琢磨坊」
「でもなんとかする！　ひとりぼっちとか冗談じゃない！」
「ふ、ふ、ふ。ぬしの口車に期待させてもらおうかの」
言うなり、くるりと背を向け神様は歩き出した。
「神様、呼んだら来てくれるよな」
「おう、構わんぞ」
「ちょっとくらいは話を合わせてくれよ！　また後でな！」
手だけ挙げて応えてくれる神様の後ろ姿が木々の間に消えるのを見送り、琢磨は元来た方向へ走り出した。
何かうまい言葉を考えなければ。そうとも、神様をこのまま山にひとりぼっちにさせておくものか。

３―４

「いいよ」

ぶふっ、と神様は思わず茶を噴いた。

「い、いいのか？」

発端は、琢磨が最初から自分を神様呼ばわりで呼び出し、事情をそのまま両親に説明し始めたこと。普通は実在しない存在の代表である「神」を話題にするのが正気の沙汰ではないことくらい、当の神様にも見当はつく。

隣に琢磨、座卓を挟んだ向かいに琢磨の両親、という構図もあいまって言葉にしがたい居心地の悪さに神様が湯呑みから何口目かの緑茶を口に含んだとき、琢磨が説明を終え、両親に結論である神様の居候の許可を求めた。

対する両親は顔を見合わせいくつか言葉を交わしたかと思うと、了承の言葉で応じたのだ。

琢磨のスタートダッシュが想定外なら、ゴールの方から駆け寄ってくるのも想定外。質疑応答を予想しての構えは完全な肩すかしとなってしまった。

目を丸くしている神様に、琢磨の父は、

「母は優しい人間でしたが、流されたりだまされたりするような人間ではありませんでした。その母が一生を懸けてあなたを守ろうとしたのなら、息子である私もあなたを信じます。それに――」

一旦言葉を切ると、笑いかけた。

「私はあなたを見たことがあります。幼い頃のたった一度きりですが、そのときと変わらない姿でまたお目にかかっては、息子の正気を疑うどころではありませんよ」

「そうだったか……」

「父さんも神様知ってたのか」

「神様だとは知らなかったけどな」

しかし、一目見ただけの面影をそこまで覚えていられるものなのか？

考えることはみな同じだったらしく、三人分の視線が琢磨の父に集中した。
「いや、その……なんだ」
所在なさげに頭をかくと、彼は真顔になった。
「今おれには、かあさんがいる。それが全てだ――いてっ」
隣でうつむいた連れ合いから脇腹に肘打ちを受け、真顔が困ったような笑顔に変わる。
「よくわからぬが、じゃれおるのう」
呆れ顔で、続く肘打ちに甘んじる様を見守る神様。隣の琢磨はというと、そもそもその言葉が何を意味するのか分からず、また誰も教えてくれないので、困った顔で眉を寄せ、黙っていた。
「いてて、いてっ、こらかあさん！」
「帰ったら丸一日、メニューのリクエスト受け付けないから。……好物しか食べさせてあげない」
「楽しみにしてる。――ご存じかもしれませんが、私は錬磨といいます」
「朱鷺絵です」
「オレは」
「いやよく知っとる」
「みもふたもねえ！」
「わしは紗雫媛。源の竜神である。不束者じゃが、よしなに頼む」
こうして、源家に家族が増えることとなった。

肆／神様のシルクハット

4－1

金が要る。

大金が、今すぐに。

パチンコや競馬で当てれば間違いなく入ってはくるが、それを待っている暇はない。下手をすれば今夜にでも借金取りに捕まり、内臓なり何なり命懸けの手段で借金を取り立てられてしまうのだ。

手段を選んでいる余裕はない。

そうだ、銀行、行こう。

マスクと軍手はもう着けてある。サングラスと上着と包丁はついさっきスーパーで買ってきた。俺も馬鹿じゃあない、使うのは全部、珍しくもない安物だから、用が済んですぐ捨てれば足はつきづらいはずだ。

一旦前を通り過ぎ、自動ドアのガラス越しに中にいる人数を確認する。平日の昼下がりということもあり、結構少ない。

まずは深呼吸。出だしでとちってなめられてはたまらない。

「よし――」

いくぞ。

サングラスをかけ、上着の懐に忍ばせた包丁の柄を握り、自動ドアの前に立つ。

「いらっしゃいま――」

さっそく歩み寄ってくる銀行員を捕まえ、包丁を突きつける。

「騒ぐな。どういう客かはわかるだろう」

引きつった顔で小刻みにうなずく銀行員。カウンターの向こうや、他の客も事態を理解し、店内が一気に静まり返る。しかし、何やら電子音が止まない。

店内を見回すと――変なのがいた。

「ふ、ふ、ふ。わしのぼすごどらは百戦錬磨じゃぞ。……ん？」

変なのがこっちに気付いてＤＳを閉じた。
長い黒髪に赤く長い帽子をかぶった、赤と白の着物の女。状況がわかっていないのか、周囲を不思議そうに見回している。俺以外の全員が目で叫んでいた。空気読め！　と。
「お前も動くな。ぶっ刺されたくなかったらな」
しばらくじっと俺を見つめていたそいつは、俺の言葉が届いたのかどうか不安になりかけた頃、閃いた、という風情で手のひらを拳で叩き、立ち上がった。
「ぬしは、銀行強盗か！」
「何だと思ってたんだテメエ！」
なめてんのかこいつは！
「つまり、悪い奴じゃな！」
「だからどうしたよ、正義の味方か、ええ！？」
捕まえていた銀行員を突き飛ばしざま歩み寄り、切りつけ――あれ手応えすげえ硬え？　包丁弾かれて飛んじまったんだけど？
あっけにとられる俺の腰を、女がぐいと抱え、持ち上げた。
「な、何しやがる！」
女の脇に抱えられ、腰を支点に畳（たた）まれるような体勢。俺の尻が前、上半身が後ろを向く。女の力は異様に強く、腕が全く外せない。
「お仕置きじゃ。後で駐在さんにもしぼってもらうことじゃな」
女の片手が空く気配。
「え？」
ばちいいいん！！
「ぎゃあああッ！？」
痛え！　何！？　何された！？
ばちいいいん！！
「ぎゃあああああッ！！」
痛え！　尻痛え！　尻ひっぱたかれてるのか俺！？
「な――なんなんだテメエ！？」
「ん？　わしか。えーと……通りすがりの竜神じゃ。覚えておけ」

ばちいいいん！！
「ぎゃあああああああああッ！！」
頼む、おまわりさん。俺が悪かった。だから早く助けて……。
ばちいいいん！！

4―2

「源センパイ、タオルどうぞ！」
「ありがとう。悪いけどそこに置いといてくれるか。もうひとっ走りしてくる」
「あ、はい。わかりました……」
心なしか落ち込んだ表情のマネージャーの脇を抜け、琢磨（たくま）は校門から外へ走り出した。
放課後の街は茜（あかね）色に染まり、沈みかけの残照がまぶしい。
「相変わらずクールだな、源」
聞き慣れた声が追ってきて、その主の気配が程なく隣に並び併走を始めた。
「マネージャーの笑顔を一刀両断とか、マジ鬼じゃね？」
「鑑（かがみ）か」
鑑宗佐（そうすけ）。琢磨と同じ、陸上部の中距離要員だ。振り向くまでもなく、いつもどおり日焼けした浅黒い顔に人懐っこい笑みを浮かべているのだろう。陽射しが熱いしまぶしいしであまりそちらを向きたくない。
「おばあちゃんだっけ。落ち込むのはわかるけど、もう一ヶ月経ってるはずだろ。悪い意味で本調子取り戻してないか」
「そんなこと言うんならお前がフォローしといてくれよ。女子好きだろ」
「うん、あの子かわいいしな」
横目で見ると案の定、満面の笑みで親指を立てるイケメン一匹。
歯は白く、上がった口角がきらりと輝いている。
「今日モス行く約束は取り付けてある！」

「……さすが。女好きの鑑だな」
常日頃「異性交遊サイコー！」と公言してはばからないだけのことはある。いい意味で油断も隙もない。
「だがな源、オレが言いたいのはそこじゃない」
「ん？」
「お前さ、女子避けてるだろ」
「苦手なんだよ。悪いか」
「悪いな。かなり悪い。話がすべっちゃうパーティーの司会並みに悪い」
「価値基準わかんねーよ」
「苦手っつっても、源は女子と話せないわけじゃないしなあ……」
「まあな」
曲がりなりにも思春期の男だ。異性に興味がないわけではない。幼い頃の遊び相手が超のつく年上の女性だったことが少なからず影響しているのだろう、話すこと自体も苦ではない。
「オレの心配してどうすんだよ。好きなように女子と遊べばいいだろ」
「わかってないなあ源。オレは大好きな異性交遊で抜け駆けするつもりはないぞ。だいたい、相手のいない男子の前だと、女子だって居心地悪くて男子と遊びづらいじゃないか」
これだからこいつはイケメンなのだ。清潔感ある整った顔立ちでありつつ堂々と私利私欲を公言しているので嫌みがなく、同性の琢磨としても付き合いやすいし実際男女を問わず誰とも気安く話している。琢磨には真似のできない芸当だった。
「何か理由あるんだろ？」
「理由ねえ……」
理由ならある。しかしわざわざ人に口外するようなことでもあるまい。
源琢磨は、女性の笑顔を直視できない。笑いかけられることに罪悪感を持ってしまう。

笑顔は綺麗だが儚(はかな)いものだ。自分が触れたらきっと壊れて台無しになる。その自分が女性と関わるなど論外だ。

とは言え、素っ気なく当たって自分から女性に笑顔を浮かべさせないというのも本末転倒な話ではある。

「オレも矛盾してるなあ」

「矛盾？　まあ、自覚してるなら後は克服あるのみだな」

「軽く言うなよ」

「なーに、そのうちイヤでもムラムラしてくるって。オレたち思春期真っ盛り！　青春しようぜ！」

「アホかっ！　置いてくぞ！」

学校の周囲のランニングコースも終盤に近づき、琢磨はスパートに入った。

「オッケ、じゃあ校門まで勝負な。負けた方がポカリ一本、ペットで」

「乗った！」

「よっしゃ、そうこなくちゃな！」

そろって全力疾走。

元々中距離走は、いくつか枠があるものの８００から３０００メートルという距離を高速で走り続ける競技種目だ。今までのランニングも練習の締めのクールダウンでしかなく、二人とも体力には十二分に余裕があった。

茜色の空の下、校門に砂埃(すなぼこり)が舞い上がり――琢磨の財布はちょっとだけ軽くなった。

４―３

「ただいま」

玄関のドアを開けて早々、食欲をそそる匂いに出迎えられ、琢磨の腹の虫が鳴いた。すぐにおいしくご飯をいただけるとなれば、やはり買い食いを我慢したのは間違っていなかったらしい。

「おかえり」

台所から、母の声だけが聞こえてきた。どうやら父はまだ帰ってきていないようだ。
「母さん、媛(ひめ)は？」
居間をのぞき込み、比較的普通の響きから採用された呼び名で神様の所在を問う。
神様は料理ができないので、琢磨の母が食事の支度に入ると構ってくれる相手がいなくなり、夕方は大抵琢磨が帰ってくるのを待ち構えているのだ。
祖母が亡くなってからもう一ヶ月が経つ。人里に降りてきて現代の生活にも慣れ始めた神様の最近の趣味はポケモン勝負で、琢磨との対戦で戦略を日々充実させていく神様は、ストーリーを追う、通り一遍のプレイしかしていない琢磨にはなかなか手強い相手になりつつある。
お出迎えがないとなると、どこかへ出掛けているのだろう。
「銀行に行ってるわ。ちょっと手続きをお願いしてあるの」
「そっか。じゃあ荷物置いてくる」
ジャージの類を洗濯機へ放り込んで階段を上り、部屋のドアを開けざまカバンとスポーツバッグを下ろし、ブレザーのネクタイを緩める。
「銀行におつかいか……慣れてきたもんだなあ」
神様には鹿のような長い角があるが、それは人の目に触れないようにしてあり、外出自体が騒ぎになるようなことは別に心配していない。気がかりと言えば、ごく普通にトラブルに巻き込まれること。危ない目には遭わずとも、一般常識がまだ田舎のおばあちゃんレベルなので、妙な物事に引っ掛かってはいないだろうか。
と、玄関のドアが開いて、閉まった。
「ただいま帰ったぞ」
案の定、神様だ。
「おかえりなさい」
「おかえり。なんか遅かったけど、どっか寄ってたのか？」

母の声に続き、階段を下りながら問う。
「おう、琢磨坊。帰っておったか。悪ガキを懲らしめておったら駐在さんにお茶をいただいてしまってな。ついつい話し込んでしまったわ。しかし最近のてくのろじいはすごいのう、今は駐在さんたちも仲間がどこにいるかすぐに分かるらしいぞ。じいぴいえすとかいうそうな」
満足げに目を輝かせながら、草履を脱いで上がってくる神様。その頭上には、フェルトでできたふわふわの赤いシルクハットがのっている。両親と共に悩んだ末、琢磨が選んだ“角隠し”だ。他にも候補はあったのだが、神様はこれがことさら気に入ったらしく、外出するときは必ずこれをかぶっている。
「テクノロジーか、そうだよな、昔はでかくて重かった電話が、今はナビ機能も込みで手のひらサイズだからな」
祖母の家にあった電話を思い出す。ダイヤルを回しては戻し、で架けるという使い方、今となっては気付きもしない人間もいるのではないだろうか。
「さて、脱ぐのはちと難儀じゃが」
角が内側の縁に引っ掛からないよう背伸びしつつ腰を曲げるような不自然な体勢でシルクハットを脱ぎながら、神様。腰まであるさらさらの黒髪がしばらく揺れる。
「――ありがとうな、琢磨坊。ぬしのお陰でこうして気軽に散歩できるぞ。これは大変いいものじゃ」
シルクハットを胸元で持ち、にこにこ笑う神様に、知らず、琢磨の顔が赤くなる。
「い、いや、べ別に、気にしないでくれよ。気に入ってくれたんならいいんだ、うん」
自分でも不自然なほどあからさまに顔をそらし、ぎくしゃくと脇を通り過ぎ居間に入る琢磨。思わず物陰で胸元を手で押さえ、自分に言い聞かせる。
落ち着け、源琢磨。これはただ感謝されてるだけだ。変なこと考

えるな。
オレには、そんな資格ないんだから。

伍／神様に手を

5―1

それは恐ろしいものだった。

雨、風、雷、地滑り、人の恐れる災いを一手にもたらす存在を願う者がいて、その心に訴えて災いを避けることを願う者がいたから。

だからそれは災いだった。

それの居る淵にはしばしば人が沈んできて、すぐ動かなくなった。沈んでくる人の願いは特に強かったから、それはその願いのとおりに、鎮まりあるいはより激しく荒れた。

沈んできた人の体は、それの恐ろしい体に触れると、簡単に、そしてひどく傷ついた。人はとてもとても弱々しいものだった。

やがていつからか、それは恐ろしい姿だけでなく人に似た姿も得た。

人に触れられなかったそれは、動かない人を傷つけずに触れることもできるようになった。

けれど。

誰もそれに触れてはくれなかった。

5―2

「平和じゃな」

言ってちゅう、とバニラシェイクを一口吸う神様。

「そうだな」

ポテトをほおばりながら、琢磨（たくま）。

「誰も『イーッ！』などと叫ばんの」

言いながら包み紙を解き、神様は顔を出したハンバーガーをしげしげと眺めている。

「そうだな」

「すうぱあひろいんは」

「なるの一苦労だな」
「……琢磨坊」
「安請け合いしましたごめんなさい」
神様に横目でにらまれ、琢磨はテーブルに両手をつき、突っ伏し気味に頭を下げた。
「まあ、口車に乗ったわしもわしじゃが」
ぎこちなくハンバーガーを食べ始める神様。その眉がくい、と上がった。
「――ん、いけるの。柔らか過ぎる気がせんでもないが、こういう洋風の味付けもなかなか」
日曜の昼下がり、晴れ空から注ぐ陽射しは穏やかである。
琢磨の発案した『神様スーパーヒロイン化作戦』に則り、神様はパトロールと称して琢磨を伴い街まで出てきていた。
華々しく神様のすごさをアピールすれば、神様の味方だってたくさん得られるはず、という目論見ではあったが、そもそも現代日本において“倒して納得の分かりやすい悪党”など天下の往来を闊歩していようはずもない。当ての外れた二人はとりあえず腹ごしらえに走ったのであった。
「悪い、媛」
支払いを済ませ、自動ドアから出てくるなり、琢磨。そばで待っていてくれた神様と共に歩き出し、財布をしまいながら言葉を続ける。
「今考えてみたら確かに適当なこと言ってたとは思うけど、別にウソついてかつごうとかそういうつもりはなかったんだ」
「なんじゃ、急に何事かと思えば」
突然の言葉にきょとんとしていた神様は、笑みの形に目を細めた。
「ふ、ふ、気にするな。琢磨坊はよい子じゃ。うそをつくような性根でないことくらい知っておる」
言いながら、神様は琢磨の首を片腕で捕まえ空いた手で頭をわしわしとなでた。琢磨は決して小柄ではないが、神様が長身なためほ

とんど身長差がないのだ。加えて神様の腕力は琢磨を大きく超えているため、抵抗も許されず引き寄せられる。
「ちょ、恥ずかしいだろ。離れろよ」
シャンプーか何かだろう、ほのかな香りと、首筋を捉えた柔らかさに、神様に異性を意識してしまった琢磨はつい反射的に神様の腕を振り払い、歩を進める。
「ったく『よい子』って……オレこれでもいっぱしの男のつもりなんだけどな」
どうにもこの女、スキンシップが積極的で困る。自分は恥ずかしいのに相手は恥じらいを何も見せない辺りが男扱いしてくれていないようで、あまり面白くない。
「何を言っておる。ひいき目に見積もっても、男前には十年早いわい。さあ、せっかくじゃ、現代の街を案内せい」
軽やかな足取りで琢磨を追い抜いた神様が数歩先で振り返り、言葉と共に手を差し伸べる。何を要求されているのか分からず、琢磨の視線が神様の顔と手との間を数回往復した。
琢磨の困惑に、神様も不思議そうな表情になった。
「いつぞやはわしが手を引いて森を案内してやったじゃろう。今度はぬしの番じゃ」
「それってつまり、手をつなぐってことか？」
知らず、琢磨の声が硬くなる。
「いやなのか？」
神様の顔は当然のことを断られている風情だ。
「媛……」
琢磨は確信した。
間違いない。この女、本当にオレのことを男だと思ってない。今もまだ、小さな子ども扱いでしかないんだ。
「――イヤだ」
「琢磨坊？」
琢磨の様子が変わったことに気付いた神様は手を戻し加減に首を

かしげた。
「手なんかつながない。オレを子ども扱いするなよ」
「琢磨坊、怒っておるのか？　わしは何かおかしなことを言ったか？」
「ああ、言った。オレはいつまでも子どもじゃない」
「琢磨坊……何を言っておるのじゃ？」
「……！」
何か口汚い言葉で怒鳴りつけてしまいそうな気がして、琢磨は神様から顔を背けた。神様の顔に浮かんでいる表情は、冗談やあざけりの笑みではなく、心底からの困惑。琢磨のいらだちを本気で分かっていない。
周囲を通り過ぎる人々の声や視線、姿が余計にいらだちをかき立ててくれる。
「琢磨」
初めて聞く、神様のどこか不安げな声。
「わしを――」
琢磨は顔を背けたまま走り出した。
神様がどんな顔でそんな声を出しているのか、知りたくもなかった。

5―3

「男だなんだって言って、こんなん男じゃねえ……」
始業前の教室、浅いざわめきの中で机に突っ伏したまま、琢磨はつぶやいた。
神様を置いて先に帰り、神様が帰って来ても顔を合わせず、その夜や今朝の食事のときも目を合わせていない。もちろん言葉など交わしてもいない。
相手にいらだちをぶつけて、相手の言い分を聞くことなく、自分の考えとの折り合いをつけることもなく、自分から話を打ち切って逃げ出した。

最低だ。これでは不快感にむずかる赤ん坊と変わらない。
「すげえ格好悪い……」
「源（みなもと）」
「あー食欲ねえ」
昨日の夕飯も、今朝の朝食も、まともに喉を通らなかった。思ったより、自分は繊細（せんさい）な作りだったらしい。
「おーい、源」
「……んだよ、人がどん底に沈んでるときに」
顔を上げれば、親指を立てたイケメン一匹。
鑑宗佐（かがみそうすけ）であった。人柄といい、まとっている陽性の空気といい、今の気分に全くそぐわない。
「二番目に見たくねえ顔見ちまった」
「朝の第一声それか！？　過去最高に失礼だなお前！」
「今のオレの気分、お前にゃわかんねえよ、たぶん」
きっとこいつなら、対人関係では男女問わずどんなトラブルとも無縁なのだろう。
「なんだよ、せっかくひやかしに来たのにえらく沈んでるな」
「ひやかし？」
「昨日、女連れで歩いてたろ」
「見てたのか」
「マミ先輩とスパイク買いに行ってたんだ。そしたらお前見かけてな。声かけようと思ったら、隣にすごい綺麗なお姉さんがいたんでやめといた」
「さすが」
用件そのものは珍しく色気がないが、それでも同行者にばっちり異性を選んでいるのが彼らしい。
「なんか世間慣れしてない感じだったけど、いい雰囲気だったな。やることはやってんじゃん。ほっとしたぜ源」
「いい雰囲気って、あのひとおばあちゃんの知り合いってだけで、別にそんな」

「そうなのか？　まあ……そうか。言われてみれば親戚にも見えたな。源のことが好きで好きでたまらない感じだったし」
「そう見えたか」
それはたぶん、言われて嬉しい種類の言葉だが、琢磨の気分は晴れない。
実際、神様は琢磨を一片たりと嫌っていないのだろう。鑑の言うようにとても気に入られているのだとは思う。
しかし、その好かれ方は、琢磨は嫌だったのだ。
「……やっぱオレ最低かも」
元々住んでいた場所から連れ出して、連れ出すときの約束を守れず、あげく向けられている好意にかみついた。
子どものわがままそのままだ。意地を張っても、結局子どもではないか。
「なあ源」
ぽん、と鑑は琢磨の肩に手を置き、顔をのぞき込んだ。その眼は、いつになく真面目な色を帯びている。
「なんだよ」
「ケンカしたんだろ。話してこいよ。何があったか知らないけど、行き違いがあったんなら、言いたいこと言って、言われること聴いて、お互い納得しないとすっきりしないぜ」
「そうか……そうだな」
別れ際の神様の声。本当は気がかりで仕方なかった。自分はいやな思いをしたからこそ神様に当たってしまったが、神様にはどんな思いをさせてしまったのだろう。どんな思いで、あんな声を。
始業を告げるチャイムが鳴り渡る。鑑は景気付けにか琢磨の背中を平手で引っ叩くと、席に戻って親指を立て、にっと笑って見せた。
「ったく、イケメンめ」
つくづく、いい奴だ。
思いのほかすっきりした気分で、琢磨はバッグの教科書を探った。

5―4

ぼふ、と音を立て、布団が床に置かれた。陽射しを浴びて空気を適度に含み、布団はふっくら柔らかい。

「これで、全部じゃな」

「お手伝い、ありがとうございます」

「わしは強力(ごうりき)じゃからな、骨折りでも何でもないぞ」

ベランダに干してあった布団や毛布を軽々と取り込み終え、神様。琢磨の母、朱鷺絵(ときえ)と共にそれをたたみながら、手触りを確かめるように毛布をなでるその表情が、ふと曇る。

「媛様？」

「朱鷺絵よ、わしは人に触ってはいかんか？」

「え？」

しょんぼりとうつむきながら、神様はつぶやいた。

「琢磨が、怒った」

「琢磨が？」

「頭をなでたり、手をつなごうとすると、嫌がるのじゃ」

言われて、朱鷺絵は戸惑った。頭をなでたり、手をつないだり、それはかなり、子どもじみてはいないか？

しかし、神様はいたって真顔で落ち込んでいる。悩んでいるのだ。昨日の夕方から、琢磨と神様の様子がおかしいとは思っていたが、まさかそんなことで行き違いがあったとは。

「朱鷺絵」

神様が朱鷺絵に視線を投げる。

「琢磨はわしが嫌いになったのか？　嫌いなのに、山から連れ出してくれたのか？」

「まさか。小さな頃のあの子をご存知なのでしょう？　あの子は昔からウソが下手で。今だって嫌いな相手には愛想笑いもできませんよ」

「それは……知っておるが。ではなぜ、琢磨は怒ったのじゃ？」

「その……媛様。子ども扱いされれば、ああいう年頃の子は怒りま

すよ？」
「まだ子どもじゃろう？」
ああ、そこか。と朱鷺絵は思った。
大人は子どもの気持ちがわからない。大人の多くは自分が子どもだったころのことを忘れてしまうからだ。早く大人になりたくて、大人として扱ってほしくて、でもその大人用のプライドを裏切る自分の未熟に悶(もだ)え、それでも走り続けたことを、忘れてしまう。そして親になったとき、苦笑いと共に思い出すのだ。自分は結局子どもだったのだ、と。
神様に子ども時代があったかはわからない。しかし、長生きしている以上その考え方はきっと大人のものだろう。だから、すれ違ってしまったのだ。
「大人です。琢磨はもうすぐ、大人ですよ」
「そうか……琢磨には悪いことをしてしまったのじゃな。そのつもりがなかったとはいえ、ばかにしておったのか、わしは」
ふう、とため息をつく神様。
「ならばこれからは大人の触り方をしなければならんの。夜だけなのは残念じゃが、それなら琢磨もわしを触ってくれるじゃろうし、仕方ない」
「え……夜だけ？」
「ん？　口を吸ったり、服をはだけたりすればよいのじゃろう？境内で何度か見たことがあるぞ」
「ひ、媛様！？」
「何じゃ」
思わず叫んだ朱鷺絵を見返す神様の顔は平静そのもの。それがどういう意味を持つ行為かを理解しているようには見えない。
「もしかして、わしはまた何か思い違いをしておるのか？　わしは人に触るのが好きじゃから、人が死なぬ力加減や、人が人と触れ合う様は研究してきたつもりじゃが」
「……そういう、ことですか」

ようやく、朱鷺絵は理解した。
このひとは、幼い。人格や経験は大人かも知れないが、心が幼いのだ。
人に触るのが好き、人に触りたい、触りたいのに怒られた、彼女の気がかりはそれだけだ。手元で扱える気持ちが単純過ぎて、きっと自分の身に置き換えても他人の気持ちはわからないのだ。当然『絶対にこの相手』という熱と渇(かわ)きを帯びてこそ始まるはずの行為も、意味がわからず重大に感じないから抵抗もないのだろう。
ふと朱鷺絵の中に疑問が浮かんだ。
「そういえば、媛様？」
「なんじゃ、朱鷺絵」
「私や夫には、あまり触れてくれないんですね」
琢磨が追い回されているのは日々見ているが、同居して同じ距離にいる自分たちはというと、困るほどのスキンシップを受けた覚えがない。そういった行動の対象が、なぜ琢磨だけなのだろう？
「わしは、琢磨がいい」
「というと？」
「いつか、ひとりの子どもがわしの手を取り、握ったことがある」
記憶を反芻(はんすう)するように、神様は目を閉じ、胸元に手を当てた。
「そのときまで、生きた人間が自分からわしに触れようとすることなどなかったから、驚いたし、嬉しかった。その子どもと関わりができたが、いつからか会えなくなっていた。いつかまた会いたくて……本当にまた会えた。そのとき」
ふわり、と微笑みが浮かぶ。
「嬉しかった。初めて会って、手が触れたときよりもっと、嬉しかったのだ」
「その子どもって……」
なんということだろう。こんな――綺麗な。簡単に壊れそうな澄んだ思慕(しぼ)。まだ愛情とは呼べないかも知れないけれど、神様は琢磨が好きで好きで仕方がないのだ。

そんな大事なきらめきを、取り返しのつかない無知で台無しにしてはいけない。
朱鷺絵は言った。
「媛様、それは夜だけとか、大人用とかではなくて、とても大事に思う相手とすることです。媛様自身が意味をよくわかっていないのに琢磨を相手に選べば、媛様はもちろん、琢磨も、子ども扱いよりずっと、深く傷つきますよ」
琢磨の名が出たとたん、びく、と神様の手が震える。うつむき加減のその口から、ささやきがもれた。
「それは――嫌じゃ」
「そうでしょう？」
「ならば朱鷺絵、わしはどう琢磨に触ればよかろうか。どうすれば琢磨は嫌がらんのじゃろう」
顔を上げた神様の不安げな眼が朱鷺絵の顔を映した。
実際不安なのだろう。自分の感情表現が怒りで返されて、やり方がまずかったことにも気付かなかったのだから、きっと感情そのものを否定されたように感じていたのだ。
大丈夫、と朱鷺絵は両手で神様の手をそっと握った。
「きっと琢磨は、媛様が嫌いなのではなくて、困っているんです。恥ずかしいって、言ってませんでしたか？」
「ん……言っておった」
「そこからですね。本人と相談してみましょう。あの子もきっと、学校が終われば少しは頭も冷えているでしょうし」
「そうか……わかった。相談してみる」

5―5

悪かった、と二重奏。
「え？」
「お？」
きょとんとした顔で、琢磨と神様は同時に下げていた頭を同時に

上げた。
「どうかしたのか、媛」
「琢磨こそ、どうしたのじゃ」
「いや、昨日は悪いことをしたって謝りたかったんだ。勝手なことだけ言って悪かった。媛にも思うところあっただろうし、訊いてもいいか」
「そ、そうか。わしも、子ども扱いして悪かったな、琢磨」
「……わかってくれてたのか」
「まあ、その、朱鷺絵に相談してな。わしも物知らずじゃった。すまん。わしはただ、琢磨と仲良くしたくて、すぐ近くにいたかっただけなのじゃ」
「そっか……じゃあ」
琢磨は神様に右手を差し伸べた。
「握手。これで仲直りだ」
「うむ……」
ためらいがちに伸びる神様の手を捕まえ、握る。
「あっ……」
なぜか逃げるように引っ込もうとする手を、琢磨は放さない。逃げられては握手にならないからだ。
神様の手を捕まえたまま、琢磨は思わずつぶやいた。
「綺麗な手だな」
「そ、そうか？」
「ああ」
少し冷たいが、しっとりとしていて、肌のきめが恐ろしいほど細かく、傷どころかしみの一つもない。
「触ってること自体が申し訳なくなってくる」
「別にずっとでも構わぬぞ。わしは琢磨の手が好きだからな」
「そう言われると恥ずかしいんだけど」
「す、すまん」
「まあ……ともかく。またよろしくな、媛」

「お、おう。またよろしく頼むぞ、琢磨」
神様の表情からこわばりが薄れ、その手にぎゅ、と力がこもる。
「――いててて！　痛えよ媛！」
「む、つい加減が。じゃがしばらく放さんぞ」
「いや放せよ、痛いし」
とたん、神様の眉が下がる。
「琢磨……わしが嫌いか？」
「それはない」
返ってきた即答に、下がった眉が、すぐさま上がった。
「ならよかろう」
「なんか理不尽だっ！」
琢磨としては訊かれたことに答えただけであって、神様の眉の上下の理由はわかっていない。ただ、自分で自分が不利になるような答えを返してしまったことだけはわかった。
「さっそく仲いいわねえ」
ひょい、と居間から朱鷺絵（ときえ）が顔を出した。
「あ、ただいま母さん」
「お帰り琢磨。媛様とクッキー焼いてみたの。荷物置いてらっしゃい」
「へえ、何かいいにおいすると思った。ほら媛、放せよ」
「仕方あるまい。すぐ戻るんじゃぞ」
「二階に行くだけで何言ってんだ、心配性だな」
階段を駆け上がる琢磨。段を飛ばすその足取りは軽い。
仲直りできてよかった。笑顔は、本当は嫌いではない。

伍／神様に手を（後書き）

彼の名前から「坊」が取れました。

陸／神様とマネージャー

6－1

目覚めた瞬間焦げ臭い。

「火事か！？」

がば、と布団をはねのけ琢磨（たくま）は跳び起きた。

部屋を飛び出し階段を駆け下りる。居間に飛び込むと黒煙を上げるガスコンロ――のそばに人影が二つあった。琢磨の母と、なぜか神様。彼女はいつもならまだ寝ているはずだが。

「おはよう琢磨」

「ああ、おはよう母さん――じゃねーよ！　火事か無事か無傷だな！？」

「うん、無事鎮火。ごめんね琢磨、それにお父さん。ちょっと失敗しちゃった」

息子と、遅れてやってきた夫に、朱鷺絵（ときえ）は「てへ」と後ろ頭に手を当ててみせた。

「いや、ちょっとってレベルじゃないだろあれ」

琢磨の視線の先には、全く原形を留めていない黒い何かがこんもりと乗った黒焦げのフライパン。飛び出した中身がガスコンロや周囲の壁にこびりつき、台所は黒煙とすすと焦げた何かでもはや暗黒一色の魔界と化している。

「片付けは……ちょっとかかるわね」

「朝練休むわ。父さん仕事だし、これ母さんだけだと面倒だろ」

「いいの？」

「いいから言ってんだろ」

「ありがとう琢磨。助かるわ」

「で、あっちは何してるんだ？」

「ショックなことがあったのよ。そっとしておいてあげて」

朱鷺絵の後ろでは、さっきから無言のまま神様がうつむいている。

彼女は普段の巫女装束に、デニム地に毛筆タッチで『チェンジ冷熱ハンド！』と書いてあるエプロンを付けていたが、元が和装な上にエプロン全体が黒く汚れていることもあって、凛とした美貌には壊滅的に似合っていない。
「ショックなことねえ」
「とりあえず、朝ご飯は用意できてるわ。けど、お弁当を作ろうと思ったらやり過ぎちゃって。お父さんの分は確保できてるから安心してね」
その言葉に、琢磨は嫌な予感がした。お父さんの分「は」って、何だ？
「ありがとう。しかしかあさんが失敗なんて、珍しいな」
「ちょっと事情があって。後で話すわ」
「ところで母さん……オレの分の弁当は？」
「ないわ」
朱鷺絵はきっぱり言い切った。予感を裏切らない豪速球である。
「ひでえ！」
「琢磨の優先順位はお父さんの次。諦めなさい」
「さすが母さん、潔（いさぎよ）いぜチクショウ！」
「でもお昼時にはちゃんと食べられるようにするから、そこは心配しないでいいわ」
「そっか」
とたん、琢磨の表情が輝きを取り戻す。
「あてにしてるぜ」
「私はそろそろあてにされなくてもよくなりそうだけどね」
「なんだそれ」
「さあ、何かしらね」
くすくすと笑いながら、朱鷺絵は朝食の準備に移った。
神様は、まだコンロの前で固まっていた。

6―2

少し前のことだ。
陸上部のマネージャーである橘川直（きっかわすなお）は部室の片付けをしていた。
埃が立つので換気のため窓やドアは開けてあったが、かさばるものも多く、一通り片付け終わる頃には彼女の額にはうっすら汗が浮いていた。
残っていたのは、用具ロッカーの上に積まれた、古いスターティングブロック。トラック競技のスタートダッシュに使う足場だ。長い金属の塊なので当然重く、後回しにしていた。
他の部員はランニングに出ていたし、いても本来マネージャーの仕事である片付けに部員の手を借りるのは少し申し訳ない。だから直は、自分ひとりで片付けようと脚立を持ち出し、ロッカーの上に手を伸ばした。
「ん……！」
小柄な彼女には、脚立の高さも少し足りなかった。脚立の上で背伸びして、ようやく指先が届く程度。
何度か指先を引っ掛けて、スターティングブロックが動いた、と思ったときには、それは崩れ、落ちてくるところだった。爪先立ちでふらつきながら引き寄せていたので踏ん張りは利かず、それを避けることはできない。
悲鳴を上げることはできなかった。
その暇がなかったからではなく、服の背中をつかんで後ろへ引っ張られ、首が絞まっていたからだ。
間近で床に激突してワンバウンド、こちらへ倒れそうになるスターティングブロックが蹴飛ばされ、頭上から声がした。
「大丈夫か」
「げほ、ごほっ」
返事をしたくても、できない。舞い上がった砂埃で、余計に息が苦しかった。
「あ、悪い。つかみっぱなしだった」
解放されて、深呼吸。見上げてみると、陸上部のロゴ入りジャー

ジを着た背中越しの横顔には見覚えがあった。
「――源センパイ！」
「危ないだろ。お前ちっちゃいんだからこういうのは他のやつに頼め」
目が合ったのも束の間、源琢磨はそれきり直に構わず歩を進め、奥にある自分のロッカーから取り出したペットボトルのラッパ飲みを始めた。
「あの、源センパイ」
ペットボトルから口を離して無言で向けられた眼に、直は思わずびくっとすくんでしまった。この先輩、普段から眉が怒ったような逆八の字で、しかも無口なのだ。にらまれてはいないのだが、近寄りがたい。
直が言葉を継げずにいると、逆に質問が飛んできた。
「お前、回し飲み大丈夫か？」
「え？　えと、はい」
質問の意図はわからないながらも、うなずく。コンビニで冗談としか思えないような期間限定ペットボトルを見つけては友達同士で回し飲みすることはよくある。最近一番のヒットはアズキ味のコーラだった。
でも、なんでいきなりそんな。
「やる。汗かいてるみたいだし」
すれ違いざまキャップをしなおしたペットボトルを押し付け、琢磨はすぐまた部室を出て行った。どうやら水分補給に寄っただけで、練習はまだ続けるつもりなのだろう。
「源センパイ……」
怖い人だと思っていた。初対面の頃から自分とは目を合わせようともしなかったし、数少ない会話でもひどくぶっきらぼうだったから。
本当は、怖くなんかなかった。いい人だ。むしろ危ないところを助けられて見上げたあの後ろ姿は――ヒーローみたいだった。

その場にまた自分ひとりになり、受け取った体勢のまま両手で握りしめていたペットボトルに視線が落ちる。

「ど、どうしよ……」

急にどきどきしてきた。たった今まで、先輩が飲んでいたものだ。回し飲みはよくやる。でも、男の人と回し飲みをしたことはまだない。だってほら、それって、あれだ。少女マンガとかでおなじみの、間接……。

「いや、ほら、でも、先輩、わたしが汗かいてたからくれたものだし？　深い意味なんかないんだ、たぶん。あったら困るし、どういう顔すればいいかわからないし、ていうか、せっかくもらったものを捨てちゃうのは、もったいないよね？」

もちろん、全部独り言。直自身、自分で何を言っているのかよくわからなくなってきている。

「と、飛んでけ邪念！　いただきます！」

とりあえず決行。どきどきしたまま一気飲みしてしまったので、中身の味はほとんど分からなかった。

そして――今。

もらったペットボトルは、なんとなく手放せず、今も部屋に置いてある。

言いそびれたお礼を言う機会がほしくてよくタオルを渡しに行くようになったが、先輩は相変わらずぶっきらぼう。会話もできない。助けてくれたことを恩に着せるどころか、直の顔も覚えていないかもしれない。

しかし、タオルを差し出せば「ありがとう」とお礼は必ず言ってくれる。いい人なのだ。

そのうちに分かったのは、女が苦手らしい、ということ。実際、それを教えてくれた鑑先輩と一緒にいるときは、ときどき、笑っている。女子部員やマネージャーと顔を合わせたときは、絶対、笑わない。

どうして女が苦手なんだろう。何かつらいことがあったのかな。

できるなら力になりたい。わたしは、いいところ知っちゃったから。

6―3

源琢磨は学食で昼食をとる。

普通の男子高校生の例に漏れず母親の弁当持参でそれしか食べないが、別に注文しないからといってとがめられることはない。

特別誰かと話しながら食べるのが好きなわけではなく、そもそも相手もいないのだが、人のざわめき自体は嫌いではないのだ。

だから、昼休みの到来を告げるチャイムが鳴ったほとんどその直後に震えた携帯電話の画面を見たとき、琢磨は困惑した。

『屋上に行くこと』

母から届いていたメールの文面は、そのたった一行だけだった。

「なんだそれ」

つぶやきに応えがあるわけもなく、そして空腹は、疑問をはさむ余地のない強制力であった。なんといっても生き物の根幹たる三大欲求の一角である。

しぶしぶながらも手ぶらの琢磨は屋上に向かうしかなかった。

埃っぽい階段を上り、軋む鉄のドアを押し開けるなりドアの隙間から差し込む光に、思わず目を閉じる。

「へえ」

目が慣れてみると、穏やかな陽射しとゆるい風。初めて来てみたが、給水タンクや配管が鎮座している殺風景さの割に、居心地がよさそうだ。

がさ、とビニール袋がこすれるような音がした。

「先客か？」

先へと進んでみると、手頃な配管に腰を下ろしてリスよろしく胸元に両手でつかんだパンをぱくついていた女子生徒が、琢磨の姿を認めたとたん、びく！　と立ち上がった。制服のネクタイの色から、下級生だと分かる。

驚いているようだが、パンを口に含んだ直後だったらしく、丸くした目で琢磨を見つめながら、口がもぐもぐと忙しく動いている。
反応に困る琢磨と、驚いている女子生徒。微妙に気まずい静寂は、女子生徒がパンを飲み込み、ようやく表情どおりの声を発したことで破られた。
「源センパイ！　どうしてこんなところに！」
「は？」
誰お前、と言いかけて、その顔には見覚えがあったことに気が付いた。
「お前、マネージャー？」
「そ、そうです！　橘川直（きっかわすなお）です！」
「いや、名前言われても。覚えてないし」
「やっぱり！？」
がっくりとうなだれる直。しかし胸元に両手で持っているパンは放さない。そこから漂う香ばしい匂いに、琢磨の腹の虫がぐう、と鳴いた。麦パンか何かだろうか、いい匂いだ。
「あれ、源センパイ、ご飯はどうしたんですか？」
「食えるはずなんだが」
どういうことですか、と言いかけた直と琢磨に注いでいた陽射しが一瞬翳（かげ）り、ずどん、と屋上全体が揺れた。
直後響く、綺麗な低女声（アルト）。
「待たせたな琢磨！」
「なにい！？」
ぎょっとして周囲を見回す琢磨の前に、長身の女性が頭上から軽やかに一回転して降り立った。
腰までの黒髪に赤いフェルトのシルクハット、白衣に緋袴の巫女装束。手にした布の包みを琢磨に突き出し、彼女は言った。
「弁当を持ってきたぞ！」
「ちょっと待てどっから来た！？」
「空に決まっておろう。走ってきたのだ」

人差し指を真上に伸ばす神様。
「空って……走れるもんなのか」
「前に言うたぞ、わしは竜神じゃと。竜は飛ばぬ。雲を踏みしめ空を駆けるものよ。まあ、この辺りは雲が薄かったので無理矢理跳び下りてきたがの」
「……さすが神」
遥か上空を流れる雲を見上げ、つぶやく琢磨。あの高さからここまで落ちてきて五体満足でぴんぴんしているとは、頑丈にも程がある。
「ところで琢磨、何じゃこの娘は」
あっけにとられたまま固まっている直を目に留め、神様が問う。
「オレの部活のマネージャー……っつってもわからないか。部活動の手伝いしてくれてるやつだよ」
「ほう。……琢磨がいつも世話になっておるようで。すまぬのう」
「え？　ええと、その、どういたしまして」
神様に頭を下げられ、わけが分からぬままうなずき返す直。
「さて琢磨、弁当じゃ」
「ああ、ありがとう。ホント助かった」
「ちゃんと朱鷺絵（ときえ）の作ったものじゃ。焦げてはおらんぞ」
口調といい、表情といい、神様はどこかすねたような様子だ。
そこで琢磨は気付いた。母が作ったものだから焦げていない、ということは、今朝の惨状は母以外の誰かの手によるものだということになる。その場には、母を除けば一人しかいなかった。
「……ひょっとして」
神様は目が合ったとたん渋い顔。それは肯定だ。
「わし、才能ないかも知れん。神が料理するなど、今まで誰も想像せんかったじゃろうしな」
神様いわく、その存在を構成しているのは人の認識、願いだという。ならばなるほど、神様の手料理などというものは誰も想像しないだろうから、彼女にそういった方面の能力はきっと普通の素人並

みになかったのだ。
「わしに不可能があるなど、知らんかった。なかなかに衝撃じゃったぞ」
「それで固まってたのか」
「なに、近いうち上達する。待っておれ」
「そ、そうか。うまくいくといいな」
「うむ。朱鷺絵の手ほどきがあるのでな、わしはもう行く。弁当、残すでないぞ」
「冗談。残さねえよ」
「ではな。琢磨、それにまねえじゃあ殿」
「ああ」
「は、はい！」
神様は軽く前方へ跳躍したかと思うと、そこに階段があるかのように空中を駆け上がった。斜め４５度の上昇が不意に水平移動へ転じ、そのままかなりの速さで遠ざかってゆく。
「結構いいフォームしてるな」
見送りつぶやいた琢磨の腹の虫が、再び空腹を主張する。
「……で、いつまで直立不動なんだお前」
「はわっ！？　ご、ごめんなさいっ！」
これまた再び、びく！　と小さく跳ねて、琢磨を見て以来胸元にパンをつかんだまま気を付けの姿勢でいた直が配管の上に座り直す。
「隣いいか。座れそうな場所他にないし」
「はい！　どうぞっ！」
直の隣に腰を下ろし、バンダナで包まれていた弁当の封を解くと、琢磨は両手を合わせた。
「いただきます」
琢磨を見て、直もパンを食べ始める。
もぐもぐと無言。二人分の食べる音だけがしばらく続き、思い出したように直が口を開いた。
「あの、源センパイ」

「何だ」
「今のひとって、誰なんですか？」
「神様」
「そ、そうなんですか」
その無茶な機動力を見たばかりだ、言葉としてはふざけているが、まさにそれくらいしか形容する言葉が思いつかないし、冗談として突っ込む余地もない。
しかし、訊きたかったのはそういうことではないのだ。
どういう関係なのだろう。とても親しげな様子だったし、琢磨も、言葉こそ普段どおりぶっきらぼうだが、直が見慣れているような突き放した雰囲気はなかった。
それに、料理を練習していて、すぐうまくなるから待て、とは。言われた当人の反応は薄かったが、言い出したのが女性、言われたのが男性。これはもしや――。
「いやいやいや何考えてるのわたし――って、なんでもないですすみませんごめんなさい！」
いつの間にか思ったことが口に出ていたことに気付き、直は全力で琢磨に頭を下げた。
下心があったわけではなかったが。琢磨のいいところを知っているのは自分だけだと思っていた直としては内心がもやもやと穏やかではなかった。
「センパイ、その、普段お昼ってどこで食べてるんですか？」
「学食」
「そうなんだ……教室とかじゃないんですね」
学食には自販機もあり、いつかもらったスポーツドリンクもそこで買えるものだったはずだ。
直は思った。
今度、学食で食べようかな。

漆／神様を大事に

7―1

「……ジェッソ・カナハ」

飾り気のない白い服を着た長身の若い女が無表情のまま目を伏せ、かすかな会釈と共に名乗る。

琢磨（たくま）は思わず女を凝視してしまっていた。

跳ね気味の短い銀髪に深い青色の眼――そのときの名乗りも今とほとんど同じ調子だった。別人ということはないだろう。

なぜ、山奥で見かけた町医者の助手が、自分の通う高校の、しかも自分のクラスで、教育実習生を始めようとしているのだ。医者と教師とでは分野が違いすぎるし、場所にしても離れすぎだ。

そして目が合う。その眼に、知らない人間からの凝視に対する戸惑いの色はない。間違いなく、相手も「源琢磨」を知っている。

カナハと名乗った教育実習生は、彼女の紹介を続ける担任教師をよそに、琢磨をじっと見ている。

なんだ、あの人……。

違和感は、朝のホームルームが終わり、当のカナハが立ち去るまでつきまとった。

7―2

昼休みを迎え、琢磨は考えた。

どっちで食べよう。普段どおり学食でもいいし、昨日開拓した屋上も悪くない。

とりあえず足が向く方に、と立ち上がりカバンからつかみ出そうとした弁当箱が、重い。

「……なんだこれ」

たぶん、キログラム単位。受け取ったときはすぐカバンに入れたので気にならなかったが、これは少々尋常ではない。

何気なく包みのバンダナを解き、入っていたアルミホイル包みの三角形をつか――めなかった。それは、おにぎりという常識に対する力加減を遥かに裏切る大質量。
落下した三角形は鈍い振動と共に頂点で床に接し、そのまま。倒れない。
「ちょ」
刺さっている。
床のくぼみから引き抜いたそれの、破れたアルミホイルの隙間からのぞく地肌は白く、海苔を巻かれている。全体を構成しているはずの米の粒は判別もつかず、表面は陶器じみたなめらかさ。爪の先が引っかかりもしない。
それでもこれは、おにぎりの材料で、おにぎりの製法で、おにぎりとして完成したに違いない。人間業ではないが、源家には人間離れした家族がいるのだから。
「……全力で握ったんだろうな」
おにぎりなら、焦げたり、味付けを間違ったり、食べ物として壊滅的な不都合が起きる心配は薄い。昨日の厨房黒焦げ事件を踏まえての選択だったのだろう。
だが、まさかこんな盲点があったとは。
全力で物事に打ち込んでくれるのは、作ってもらえた側としてうれしい。しかし、文字通りの全力行動は大体空回る。さすがにこういう結果はレアケースかもしれないが。
作ってくれた本人にはかわいそうだが、これは無理だ。三秒ルールを適用したとしても、そもそも人類が噛み砕けるような代物ではない。
捨てるのも忍びなく、超圧縮おにぎりをカバンにしまい直した琢磨は、一緒に入っていた母の作ったらしき小ぶりのおにぎり二つを手に教室を後にした。
学食へ。
手のひらに収まるおにぎり二つだけで運動部員の空腹は満たせな

い。昼休みのチャイム直後からのラッシュに出遅れたのは痛いが、まだ注文は間に合うはずだ。
そして案の定、琢磨は人ごみの収まり始めたカウンターできつねうどんを確保することができた。
問題はこれからだ。うどんがのびる前に、埋まりに埋まった学食内で空席を探さなくてはならない。
おもむろに歩き出す視界の隅で何かが激しく動いているような気がして、琢磨が目を向けると、下級生の女子がこちらを向いて立ち上がり、手を振っている。その向かいは空席だが、スポーツドリンクのペットボトルが置いてある。誰かが来る予定なのだろう。
後ろを振り返ってみても、誰もいない。下級生は相変わらず琢磨の方を見て手を振り続けている。
「……ひょっとして、オレ？」
よく見るとその下級生、マネージャーだ。
「み、源センパイ、もっと早く気付いてくださいっ！」
琢磨が招きに応じて歩み寄るなり、マネージャーこと橘川直（きっかわすなお）は顔を真っ赤にして小声で語気を強めた。
「恥ずかしいじゃないですかっ」
「呼べよ。お前オレの名前知ってるんだから」
思い思いの会話でざわつく周囲を見回すと、直は視線を落とし、両手の指先を突き合わせながらつぶやいた。
「学食で叫ぶとか、もっと恥ずかしいじゃないですかっ」
「今のオーバーアクションも相当だと思うけど。で、何か用か」
「え？」
ぽかん、と口が開く。
「連れがいるんだろ、邪魔はしねえよ。オレもうどんがのびるから空いた席さっさと探したいんだ。用があるんなら早くしてくれ」
直の視線が、目前の琢磨と、向かいの空席とを往復する。
「え、えと、その、そこ……連れじゃなくて」
「誰」

「源センパイの、席……の、つもり、だったんですけど。邪魔でした？」
「え、なんでオレ」
「そ、それは、その」
「まあいいや」
要領を得ない言葉の詰まりっぷりへの配慮よりも、今はうどんだ。食べ物は大事にしなければ。
「うどんが台無しになる。座っていいんだな？」
「は、はい！」
「わかった。ありがとう――いただきます」
なぜかぱあっと表情を輝かせる直の前でさっそく手を合わせると、割り箸を割り、琢磨はうどんをすすり始めた。
下手に安っぽい肉にこだわるよりも、つゆの吸いのいい油揚げの方が、歯応えがあっていい。琢磨にとって学食での定番メニューはきつねうどんなのだ。
「……ふう」
うどんをたいらげ、油揚げもなし。おにぎりを口に放り込む。
人心地ついた琢磨はようやく直に視線を戻した。視線に気付き、またリスのごとく両手でパンを抱えていた直がびく！　と背筋を伸ばす。
「オレ、お前と約束した覚えないけど。あ、それとこれ。返すぞ」
目の前に置いてあったペットボトルを直の目前に置きなおす。が、直は受け取ろうとしない。
「いえっ、それも、源センパイのです。飲んでください」
「え、冗談。後輩にたかるとか格好悪いだろ」
「いえ、たかるとか、おごるとかじゃなくて……その、お礼ですから」
「お礼？」
「前、センパイにもらいました。それ、同じのです」
沈黙。

「そんなことあったっけ？　鑑（かがみ）におごらせた回数とおごらされた回数なら――」
言いかけて、琢磨の眉が寄った。
「あいつの方が勝ち星多いじゃねーか。オレ、トータルでマイナスかよ」
ぷっ、とマネージャーが噴き出す。
「源センパイも、鑑センパイ好きなんですね」
言われて、琢磨は首をかしげた。
「なんだ「も」って」
「この前、鑑センパイにモス誘ってもらいました。そのとき、鑑センパイ言ってたんです。あいついい奴だから、悪気はないから、って」
「そりゃあ、オレあいつ嫌いじゃないけど。そこまでフォローいらねえぞ。オレ嫌われ者で十分だ」
最後のおにぎりが丸ごと琢磨の口の中に消える。もっとも、元々小ぶりだったので、大変そうな様子はない。
「嫌われ者って……」
それはもったいない、と直は思った。この人は、いい人だ。嫌われていいような人じゃない。
「センパイ、なんで、女子苦手なんですか？」
「うるせえな、女と関わりたくねえんだよ」
いらだたしげに立ち上がる琢磨。
「……一度だけ、告白したことがある。その人はうれしそうに笑ってくれた。でも、その笑顔はすぐにつらそうな顔になって、その人はいなくなった」
「そんな……」
「大事に思っても、大事にできなかった。なら、オレにそういうこと関わる資格はない――ってクソ、何べらべらしゃべってんだオレ」
髪をぐしゃぐしゃとかき乱し、琢磨は直をにらんだ。
「お前。名前」

「あ、えっ、き、橘川直です！」
「橘川。人に言うな」
「は、はい！」
いらだちもあらわに琢磨が立ち去り、残った直は、置きっぱなしで受け取ってもらえなかったペットボトルを手に取った。
また、結局お礼を言えなかった。
そして、ようやく名前を覚えて呼んでもらえたのに、うれしくはなかった。
「源センパイ……」
やっぱり、優しい人なんだ。人を傷つけるから、と自分から人を遠ざけていたなんて。
でも、間違ってる。
大事にできないからって人を遠ざけるなら、その人は誰に大事にしてもらえるの？

7―3

椅子に体重を投げ出し、机に肘を叩きつけ加減に頬杖をつく。
「なんだ源、珍しく荒れてるな」
「やなことあったに決まってるだろ。そこは察しろよ」
「へいへい」
「……そういう鑑は上機嫌だな」
斜め前の席から琢磨を振り返っている褐色イケメン、喜色満面。
「当ったり前だろ？　美人教育実習生の最初の授業だぜ？」
「ああ、そうか」
言われてみれば、今朝やってきた教育実習生の授業が午後にあると説明されていた気がする。
「ちょっと吊り目で無愛想。いいねえ。うちとけたらどんな表情になるんだろうな」
「ったく、これだからコミュニケーションの得意なヤツは」
人間関係をうまく作れず、失言のあげく後輩に凄むような先輩失

格男からすれば、人間関係を作る過程そのものを楽しめる様はうらやましい限りだ。
「源の場合、好かれるためのコミュニケーションはあんまり必要ないんだけどな」
「なんだそれ」
「お前は背中で語るタイプだ」
「それほめてんのか？」
「ある意味嫉妬してるくらいだぜ。っと、そろそろ時間だな」
どういう理屈なのか琢磨が問い直す前に、鑑は教壇に視線を戻した。とたん、午後の授業開始を告げるチャイムが鳴りわたる。
「正確だな」
つぶやいて、琢磨も机に教科書を並べる。
ジェッソ・カナハ。かつて町医者の助手として顔を合わせ、そして今、高校の教育実習生として教壇に立とうとしている謎の美形。
一体、何者なのだろう。
かすかな足音が近付いてきたかと思うと、がら、と引き戸が開き、閉まる。
教壇に進む白い姿を見ながら、ふと琢磨は違和感を覚えた。
なぜ、起立の号令がかからない？
周囲を見回してみると、うつむいていたり机に突っ伏していたりと形は様々ながら、いつの間にか教室内の全員が眠っている。
「なんだ……？」
「旧（ふる）い言葉で『眠れ』と命じた」
そんな言葉が聞こえた。
声の主は、教壇で琢磨をじっと見つめている。
「ここでそれが効かないのは、旧い言葉がわかるカナハと、タタリ憑きのミナモトタクマだけだ」
「……何の業界用語か知らねえけど、これはあんたの仕業なんだな？」
こくり、とうなずくカナハ。

「カナハは普通じゃない話をしに来た。普通の人間に聞かれたくない」
「まるでオレが普通の人間じゃないみたいだな」
「話は一つだけ」
琢磨の言葉には答えず、カナハは切り出した。
「ミナモトタクマ、御神体を渡せ。あれはジェッソのものだ」
「御神体……」
それは今、古い木箱入りで自分の部屋の押入にしまってある。考えてみればまだその中身を見たことはない。
神様のことを知っているのか？　いやそれより――神様に何をする気だ？
黙り込む琢磨を、カナハは同様に無言でじっと見つめる。
空気が、ひどく重苦しく琢磨にのしかかる。
しかし、答えなど今更出すまでもない。あれは神様のものだ。おばあちゃんの遺言で自分がおばあちゃんから継いだ、神様のためのものだ。
「断ったら、どうする」
「断ったら」
静寂が張り詰める。緊張が否応なく高まってゆく中、カナハは顔色一つ変えず口を開いた。
「どうしよう」
沈黙。
「……待て。今なんつった」
「どうしよう。断られると思ってなかった」
「もう一押しないんかい！」
思わず、だん、と机をたたき立ち上がる琢磨。対してカナハは瞬時に半歩身を引き琢磨を見つめている。相変わらず無表情だが、ひょっとすると驚いたのかもしれない。
冷静に考えてみて、得体の知れない状況下で淡々と要求を述べる無表情な美形は相当な威圧感だ。よくもまあこんな圧力に抵抗でき

たものだと今更自分をほめたくなる。
しかし、それ以前に。
「ものをまき上げようとしてる相手に相談すんな！　得体の知れない状況とか自分の正体不明っぷりとか威圧的なもん丸ごと台無しだろうが！」
カナハは小首をかしげて黙考すると、小さくうなずいた。
「ゴメンナサイ」
「謝ってほしかったわけじゃねー！　そりゃ気に入らなかったのは確かだけど！」
カナハ、再び沈黙。そして問う。
「……どうすればいい？」
「オレが訊きたいんだけど……」
じゃあ、とカナハは再び口を開いた。
「出直すことにする」
返事を待たず、すたすた、がらら。白い姿は引き戸の向こうに消える。
「……寝かしたんなら起こしてけよ」
何か、疲れた。

捌／神様の正体

8－1

夜。部屋は静かだった。

シャープペンの芯が紙面をこする音。時折そこに、紙のめくれる音が別のリズムで混じる。

一通りノートの紙面を埋め終えたところで、琢磨（たくま）は椅子の背もたれに背中を預け伸びをした。

「終わったか？」

「まあ、大体」

後ろからの低女声（アルト）に応え、首をこきこきと鳴らす。

驚くようなことはない。こうして学校の課題に手を着ける前から、背後のベッドには神様が腰掛けていて、写真付きで解説されている料理のレシピ集を読みふけっていたのだ。

これといって用事もないらしいが、神様が琢磨の部屋に入り浸るのはいつの間にか当たり前になっていた。彼女は気が向くとやってきて、琢磨が課題や何かで集中しているなら、大抵こうして終わるまで黙って見守ってくれる。

ただし、沈黙の時間が長いと、時として神様は琢磨のベッドを占拠して寝付いてしまい、琢磨は床で寝る羽目になる。

もっとも、今日はそんなこともなかったようだ。

「琢磨」

「ん？」

振り返る琢磨の前に、神様は自分の読みふけっていたレシピ集の見開きページを広げて見せた。ありえないほどの大作ぞろいの豪華な食卓が紙面に満開の華を咲かせている。

「どれが食べたい？」

「どれって……全部。美味（うま）そうだし」

「よし、わかった」

「……なあ、媛」
「言わんでよいぞ」
レシピ集の作り方ページの記述を指でなぞり目を走らせながら、神様は琢磨の声を遮った。
「身の程くらいわきまえておる。じゃが目標にまで野暮を言うでない。楽しみがあれば修業にも身が入ろうというものじゃろう」
「楽しみねえ……でもなんでそんなことオレに訊くんだ？」
修業というくらいだ、自分自身を高めるための練習に、他の人間の都合など関係してくるものだろうか。
「朱鷺絵から教わった。料理の楽しみは、食べてくれる人が喜ぶ様なのだそうな。わしが作りたいのは琢磨の弁当じゃからな」
そう言われると、琢磨としては後味の悪い思いだった。喜ぶ以前に、作ってもらったおにぎりを食べずに返したのだから。
「……悪かったよ」
「なんじゃ急に」
怪訝そうに琢磨へ視線を戻す神様。
「媛が作ってくれたおにぎり、食べなかったからな」
そんなことか、と神様の肩がすくめられる。
「わしが励めばよいだけのことじゃ。あれがぬしの弁当箱に紛れ込んだのは、朱鷺絵のはからいであって、わしの本意ではない。食べ物とも呼べぬ代物を食べてくれろとは言わぬよ」
「でも、もらった弁当は残さないのがオレの信条だったんだよ。食べるために作られて食べられないなんて、食べ物がかわいそうだろ」
琢磨の言葉を聞くと、神様は口元に手をやり、うつむき加減に肩を震わせた。
「ふ、ふ、ふ……まるで球磨じゃな。生き物であろうとなかろうと、その心を惜しむとは。さすがは孫か」
「言われてみれば……」
琢磨の中に暖かな気持ちが蘇る。
「そうだな。ものがかわいそう、っておばあちゃんの口癖だったっ

け」
特にそれと真似たつもりはないが、祖母と過ごした日々を通して、その考え方自体を身に付ける形で継いでいてもおかしくはない。
そう――源琢磨は、源球磨から受け継いだ。
気がかりが蘇り、笑みの消えた琢磨の眼が、部屋の隅、押入れを向く。そこには、長く開封されたことのない古い木箱が入っている。
「――媛」
「なんじゃ、琢磨」
「御神体って、どういうものなんだ？　媛にとって、何なんだ？」
「おう、そういえばまだわしからは言っておらなんだな」
レシピ集を閉じて脇に置くと、神様は立ち上がって押入れに向かい、しまってあった古い木箱を取り出して抱えながら再び琢磨のベッドに腰を下ろした。
神様が膝の上に置いた木箱のふたをそっと持ち上げ、中の白い布を開いていくと、白い球体が顔をのぞかせた。
神様の白い両手で持ち上げられたそれは、つるつるとした質感で、不思議なことに薄青い輝きがうっすらと全体を包んでいる。内側から光が透けているわけではなく、白い表面自体が青く光っているのだ。
「白いのに、青い……」
「丸い玉と関わりがあり、神威を揮（ふる）う存在。それが竜であった。ゆえに、この御神体に願われたのは『竜という存在』。そうして生じたのが、わしじゃ」
「媛は、これから生まれたって言うのか？」
「そうなるの。詳しい理屈は分からぬし、ただ感じるだけじゃが、これとわしとの間の縁はまだ絶えておらぬ。これがなくなっても、わしは消えてしまうじゃろうな」
がたん。思わず、琢磨は跳ねるように立ち上がっていた。体が熱い。顔がこわばる。
「ど、どうした」

「いや……なんでもない」
顔を押さえ、ことさらにゆっくりと座り直す。体の熱は鎮まらない。
あの白い女、ジェッソ・カナハは、神様を消しに来たのだ。御神体が目的だからこそ、お社に現れ、そして琢磨の通う高校に現れた。
『旧(ふる)い言葉』とやらで適当な身分を周囲に信じ込ませて。
「どう見ても『なんでもない』顔ではないぞ。何があった。何を考えておる、琢磨」
御神体を木箱にしまいながら、神様。
「だから、なんでもないって。風呂入ってくる」
「琢磨」
立ち上がった琢磨の前に、同じく立ち上がった神様が立ちふさがる。
「何を隠しておる」
「紗雫(さな)」
「え――」
突然名を呼び捨てられ、神様の動きが止まる。その眼を、琢磨はじっと見つめた。考えてみれば、こうして真っ向から目を合わせたのは初めてかも知れない。
「た、琢磨？」
深い翠の瞳が落ち着きなく揺らいで逸(そ)れ、白い頬に赤みが差す。
「な、なんじゃ、急に……わしの名を呼び捨ておって。何か、その、落ち着かぬではないか」
「あんたがいなくなるのは、オレはイヤだ」
それだけ言うと琢磨は神様の脇を抜け、部屋を出た。階段を降りながらも、考えはめぐる。
ジェッソ・カナハは、まっとうな生き物ではあるまい。その力の片鱗であるところの『旧い言葉』は、当人たちにもそれと気付かせぬまま校舎の大半の人間を眠らせていた。
これに対して源琢磨が切れる手札は唯一、その『旧い言葉』が効

かないらしいということだ。
しかし、それも相手にとっては想定内。いざ荒事(あらごと)になって、太刀打ちできるかというと心許(こころもと)ない。
だから、どうした。立ち向かう手立てがないからと、膝を屈せるか。認める気のないことを、見過ごせるか。
それは否。断じて否。
紗雫媛は、とうの昔に大事なひとだ。

8―2

疾駆。彼女の動きは、まさにそれだった。
行く手は青く、足下には白い雲。何一つ支えのないはずの空にありながら、目まぐるしく動く草履(ぞうり)は彼女をその高さへ留め、かつ確実に前へと進めていた。
「世話をかけさせるのう」
つぶやく神様の手には、バンダナで包まれた弁当箱がひとつ。
朝、食事を済ませた琢磨は弁当も受け取らずに家を出てしまった。食器の片付けや洗濯物、その他家事もろもろが落ち着いた昼前になってようやくそれが判明したため、急遽(きゅうきょ)神様がそれを届けに出たのである。
琢磨の母も手が空いていたのだが、神様は自分が行くと言い出した。神様には気がかりがあったのだ。
食べ物を大事に扱う琢磨が、弁当を忘れることはない。その琢磨が弁当を置いて出かけるというのは、異常事態と言っていい。
そもそも昨晩から、琢磨の様子は明らかにおかしかった。
「紗雫……か」
思い返した神様の顔がほのかに赤らむ。琢磨に名を呼ばれ見つめられたとき、なぜかはよく分からないが気持ちが浮き立った。自分の不可解な動揺に戸惑い、結局琢磨が話をはぐらかすのを許してしまったのだ。
なぜだろう、手や体が直接触れたわけでもないのに……とても気

持ちがよかった。
その琢磨に、何が険しい顔をさせたのか。
「――む」
目前の中空を蹴りつけ、神様は後ろへ跳びのいた。直後真上から、青白く細長い何かが飛来し彼女の頭があったはずの位置を通過していく。
上空へ戻っていく飛来物を目で追う形で、神様は自分を見下ろす襲撃者の姿を捉えた。
白いコートを着た、短い銀髪の女。その姿は小揺るぎもせず空中にたたずんでいる。
「何者じゃ――ん？」
問いながら、神様は違和感を覚えた。相手から、自分と同じような気配がする。
「ジェッソ・カナハ。お前がミナモトタクマに憑くタタリだな」
ぴく、と神様の肩が震えた。
「タタリとやらが何かは知らぬが、今ぬしが口にした名をもう一度言ってみよ」
「ミナモトタクマのことか」
「……琢磨に、何か、したのか？」
「御神体を渡せと言ったら、断られた。あれはカナハたちジェッソのものだ」
「そういうことか」
琢磨の、御神体に対する反応。あれは、御神体が失われることを考えてしまったからこそのものだったのだ。
「ミナモトクマが死んだときにお前が消えなかったから、話がややこしくなった。神堕（お）としが起きる前に――」
ぎちり、と音を立ててカナハの右の拳が握られ、腕が振りかぶられる。その肘から先が、見る間に青白く凍りついた。
「お前を破壊する」
突き出された拳が、飛んだ。カナハの肘から先が外れ、猛回転を

帯びた氷柱と化して神様に迫る。
神様に対する不意討ちの正体は、これだったのだ。
「ぬ――」
即座に半身になり左の平手を叩きつけて氷柱をさばく神様。右手の弁当箱は回避が間に合わず、氷柱の回転に巻き込まれ砕け散った。弁当を惜しむ間もなく、既に鼻先にまで自由落下してきていたカナハが「右腕を」振りかぶる。対する神様はそのまま前方へ踏み込み、左手を引き戻しながら右の拳を打ち上げた。
上下それぞれから繰り出された拳が真っ向からぶつかり合い、がごん、と音がする。弾ける衝撃に、神様の足元の雲が散った。
「ぬしは……何者じゃ」
神様が空中を踏みしめているように、カナハもまた何もないはずの空中でしっかりと踏ん張っていた。
それだけではない。自分の腕を凍らせて撃ち出したかと思えば、次の瞬間には撃ち出したはずの腕で殴りかかってきた。しかもその膂力（りょりょく）は人類のそれを遥かに凌駕している。
そして、神様は自分と同じ質の力を相手に感じていた。
「ぬしも、わしと同じ神ではないのか？」
「違う」
打ち合わせていた拳を足場代わりに、腕の力だけで上空へ跳躍したカナハは、そのまま頭を下にして「着地」、見上げるような形で神様を真上から見下ろし、静止した。
「お前たちが『御神体』と呼ぶものこそが、ジェッソの武器。お前は神ではない。使い手もなく暴走した武器の生み出した、幻だ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1780z/

かみさまといっしょ

2012年1月15日01時46分発行